

書 評

「飛鳥時代の天文学」

斉藤国治 著

(河出書房新社, 1982年7月20日発行)
 定価 980円, B6, 185頁

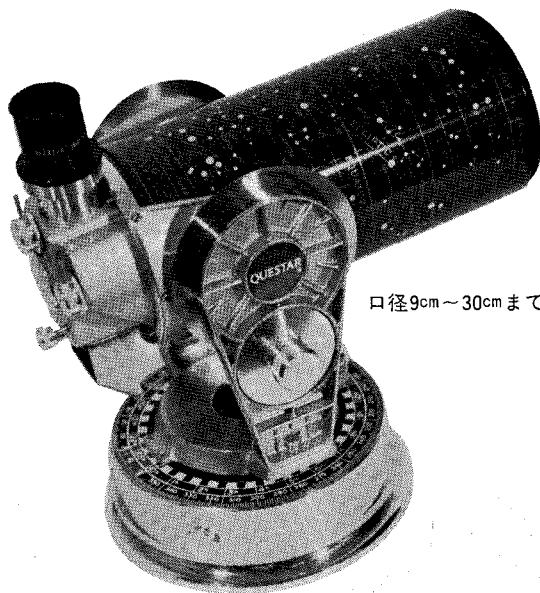
短編小説集では、その中の小説の題名の一つをとって書名とすることがよく行われる。本書もそれと同じである。著者が従来雑誌や東京天文台報に発表した、おのおの独立した報告に若干手を加えたものがほとんどであり、純粋に飛鳥時代の天文観測を扱っているのは第1章の30頁ほどである。古い天文関係の記録の検証は小川清彦氏らによって行われた事があるが、日本書紀や続日本紀の天文関係記事を逐一追って検証したことは(日食を除いては)初めてであろう。それらの記録が計算による検証に堪えられるほど確かなものであることを証したことは評価されるべきと思われる。第2章は益田の岩船である。奈良県に残るこの巨大な石造物については古来諸説がある。著者はそれにまた一説を加えている。ここには岩船の方角・寸法から従来の説も示されているから興味ある読者はそれらに基づいて自ら新説をたてるのも

一興であろう。第3章は「飛鳥時代の1日は午前3時に始まった」という証明?である。日の境界が丑寅(午前3時)にあるということは橋本万平氏が「日本の時刻制度」(昭41年, 塙書房)の江戸時代以前の時刻制度の章で多くの文献を引用して例証されている。そのことに全然ふれないで、ことさらに「飛鳥時代の」と入れて著者の“前人未踏”の仕事強調しているのは、もちろん橋本氏は計算による検証はしていないにしてもいかなものであろうか? 著者がここで検証している例で飛鳥時代(西暦710年まで)に属するものはたった一つで、他のすべては後代のものであることで自ら示しているように1日が午前3時に始まるのは飛鳥時代だけの話ではない。第6章では浅草天文台で使用された幕府天文方の観測機器が図入りで説明されている。これらについては大谷亮吉氏が名著「伊能忠敬」で紹介して以来のもので今の読者には有意義な章であろう。本書は通俗的解説書に見られない著者の独自性を強調したユニークな内容である。それ故にかえって先人の仕事にもっと配慮をはらうべきであろう。他に「明月記の天文記事」「寛政7年の星食」「明治10年の火星大接近」「明治20年のコロナ観測」などに関する章がある。 (内田正男)

持つ誇り。

マクストフ・カセグレンの最高峰

QUESTAR



口径9cm～30cmまで各種

世界の天文家の愛用機です。機構・精度・性能とも、学術用大型望遠鏡に匹敵します。お手持ちの望遠鏡にあき足りない方、最高レベルを目ざされる方のために。

マクストフ・カセグレン・カタディオプトリック光学系

有効口径.....89mm

焦点距離.....実視用 1,300mm (f/14.4)

カメラ用 1,600mm (f/16)

接眼鏡倍率.....58-80× 視野55'

80-130× 視野42'

カメラ視野.....1°30'

分解能.....1"

至近距離.....3m

クエストオリジナルカタログご希望の方は切手1200円同封の上、お申し込みください。



クエスト社日本総代理店

株式会社 エーピー

〒158 東京都世田谷区 玉川郵便局私書箱32号
 ☎(03)705-3693